九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

近世日本における海外情報の入手ルートと質 ： 朱一貴の乱（台湾）情報を事例に

松尾, 晋一
長崎県立大学地域創造学部 ： 准教授

https://hdl.handle.net/2324/4123608

出版情報：長崎学 ： 長崎市長崎学研究所紀要. 1, pp.23-34, 2017-03-31. 長崎市長崎学研究所
バージョン：
権利関係：

近世日本における海外情報の入手ルートと質

―朱一貴の乱（台湾）情報を事例に―

松尾　晋一

はじめに

幕府は一六三〇年代までに海外と関係を持つ港を限定して、ヒトやモノの動きなどを整理した。こうした状況下に幕府は長崎から、オランダ商館長に提出させたオランダ風説書や長崎に入港した唐船に提出させた口述書である所謂唐船風説書、漂流民の口上書などを得て海外の情報を入手した。そして、これ以外にも対馬宗家や薩摩島津家から情報を得た。限られたルートから入る海外情報に様々なバイアスがあったことは、当然と言える。

こうした海外情報に関する研究は、近年、オランダ風説書をはじめ、新たな事実が明らかになり進展が著しい[1]。しかし、ロナルド・トビ氏が情報ルートの相互関係に関して注目すべきと提唱したものの[2]、このような視角からの研究が蓄積されてきたかというと、そうではない。仮に、日本が外の世界とどう向き合おうとしていたのか、その真髄を理解することを課題とすれば、二国間を対象とするのではなく包括的に外の世界を捉え考察を加えなければ解決できないはずである。確かに情報発信地から着信地の地理的条件、情報の性質が情報ルートに与える影響は小さくない。四つの「口」それぞれの置かれた環境などは異なるから[3]、ケースによるとの指摘もされよう。だが、事例を蓄積することでみえてくる傾向もあるはずである。また、包括的に外の世界を捉え、各情報ルートに共通する事象を扱うことで各ルートの特質もみえてくるであろう[4]。

こうした理解をふまえて、本稿では台湾で起きた朱一貴の乱に関する情報に注目する。朱一貴の乱とは、康熙六〇～六一年（一七二一～一七二二）に台湾で起きた民衆の反乱で、朱一貴が王と称した。しかし、内部分裂もあって閩浙総督の覚羅満保によって鎮圧された[5]。

この情報の日本伝来に関する研究は、真栄平房昭「近世日本における海外情報と琉球の位置」[6]、松浦章「清代台湾朱一貴の乱の日本伝聞」[7]があり、朱一貴の乱に関する情報が長崎と琉球経由の島津家から幕府へ伝わったことが明らかになっている。

真栄平は、本稿の目的と特に関連する点として、長崎に来航した唐船からの情報と比較して琉球からの情報は、独自の事実内容を含み情報の質が高かったことを確認している。これは渡唐役人が清滞在中に実際に見聞きした事実や、清朝官辺筋から政治情報が多いことから裏づけられている。一方松浦章は、林春勝・信篤父子が編纂した「華夷変態」収載の唐船風説書を分析した。そしてそこから、長崎に入ってきた情報には事実との相違が若干見られる場合もあるが、官憲の調査でしか知ることができないものと思われる情報も含まれていて極めて質の高いものであった、と評価している。

実はこの両氏の評価は、日本への伝来時期が異なった情報から導き出している。情報の質に関することだけではなく、伝来時期に留意しなければ伝来ルートへの評価を見誤ることをこれは教えてくれている。

そこでまず、日本が朱一貴の乱の情報を最初に得た段階をこれまで注目されてこなかった史料で補い再検討し、つぎにそれをふまえて情報の国内受容と影響について確認する。そして最後に宗家が得た情報を他から得た情報と比較検討して、得られた結果をふまえて海外情報の日本伝来に関する分析の課題を示していく。

第一章　朱一貴の乱発生と日本への情報伝来

中国に残存している『清史稿』、『重修台湾府志』（一七四七年刊）、『重修台湾県志』（一七五二年刊）、『平台紀略』（一七二三年自序）といった記録で朱一貴の乱の経過は確認できる[8]。しかし同じ事項でも記録によって日付がまちまちで、乱のはじまりと終結が特定できない。雍正元年（一七二三）五月五日付自序の『平台紀略』によると、四月一九日に朱一貴を首領にして李勇・呉外等五二人が盟約を結び蜂起して、五月一日には台湾府城を陥落させたという。

これまでの研究では朱一貴の乱に関する情報が最初に日本へ伝わったことを「華夷変態」収載の唐船風説書で確認していて、享保六年（一七二一）六月二五日長崎入港の十七番寧波船のものであった[9]。そこには、「然ば福建之内台湾表兵乱之消息、先達入津仕候唐人共申上と奉存候付、再説不仕候、未北京ゟ之下知も到莱無之由風聞仕候、尤福建之外諸省之儀は、何方も寧謐之段伝承申候」とあり、この船より前に台湾での反乱に関する知らせがあったことがわかる。この年の五番から十六番の風説書が収載されていないために朱一貴の乱に関する情報が日本に伝わった最初の記録として用いてきた[10]。つまり、反乱発生から約二ヶ月が経って長崎へ入ってきた情報から、これまでの研究は朱一貴の乱に関する情報の日本伝来について分析をはじめたのであった。

これを遡ることができる史料が、「大清康熙六十年台湾朱一貴乱覚書」である[11]。田中如玉父なる人物が去年今年、つまり享保七年（一七二二）と六年（一七二一）に長崎表での風聞をもとに書き置いてそれを有沢武貞が写したもので、そのなかに享保六年の六番厦門船と享保七年の拾番台湾船の風説書の朱一貴の乱に関する箇所の抜粋が収載されている[12]。後者は「華夷変態」にも収載されていて文言も基本違わない。その意味では前者も正確に写されたものである可能性は高く、史料的価値は高いと言えよう。

この史料の存在は知られていたものの[13]、前者の風説書は「華夷変態」に未収載であるから、全文紹介しておく[14]。文末の「七月」は、写した時期と、ここでは理解しておきたい。

【史料一】

日本享保六辛丑年

丑六月三日南京船出船六番厦門船一艘同月十三日長崎着岸風説之写

一大明太祖洪武帝嫡孫朱一貴年廿歳計之由、福建之内台湾辺ニ忍居当四月廿一日三千人之兵民を集め兵威を振ひ、同日ヨリ廿七日迄昼夜相戦由、加勢集り六万人程に及ヒ、台湾城主大明二人之内壱人生捕、壱人討死、相残軍兵討死・手負数万人、則廿七日落城、右之趣逃候官人五月二日厦門城江訴申候旨、夫より泉州城主江注進ス、此泉州城主ハ惣兵官トシテ大清北京康熙皇帝ゟ被付置候、覚羅万保と申大将大ニ驚、早速数万艘兵船仕立、台湾近所江出張を拵候而堅固ニ相守居申候而、北京康熙皇帝江被注進、討取之下知相待候由之、尤厦門ゟ北京迄往来六十日も懸り申候、依下知朱一貴篭居候台湾之城江押懸申趣之由風説ニ御座候、以上、

七月

さてこれを一読すると、朱一貴の乱が未解決である時の情報だと

いうことがわかる。この厦門船は六月三日に南京をでて、厦門に立ち寄って同月一三日に長崎へ来た。残念なことに厦門を出た日付はわからないが、六月上旬に大陸で知られていた台湾情報がこの時長崎に伝わったのである。

ここに記された状況を確認すると、朱一貴が同年四月二一日から三〇〇〇人の兵を集めて二七日まで昼夜戦い、その勢力は六万人にも膨れ上がった。そして台湾城主二人のうち一人を討取り一人を生け捕った。残った兵は討死、手負いとなったものが数万人に及び落城したとある。

こうした情報は後に長崎へ来た十九番南京船（七月一日長崎入港）も伝えていて、「此等え趣、先達入津仕候唐人共委細可申上と存候」とあるから[15]、そのうちのひとつが六番厦門船の情報ということになろう。【史料一】に同文がないので、この六番厦門船こそが朱一貴の乱の第一報なのかもしれない。松浦章は十九番南京船の風説書で、日本は首謀者が朱一貴であることを知らされたとしているが、この点は改められるべきであろう。

さて【史料一】の内容に戻るが、十九番南京船では二千余騎、そして台湾の惣兵・欧氏、安平鎮の副将・許氏を討ち取ったと具体的名前が記されていて違いが見られる。松浦章が明らかにしたことによると、後者の件は欧陽凱と許雲のことで、両者ともに五月朔日に死去していたのである[16]。これが事実だとすると六番厦門船の情報は誤りとなるが、台湾で反乱が起きて一ヶ月足らずであり情報が錯綜していたであろうことは想像に難くない。

続く内容で、台湾での反乱で逃げた官人により五月二日に対岸の厦門城へ伝わったことがわかる。そこから康熙帝が派遣していた覚羅満保がいる泉州城に伝わり、彼は状況に驚いて北京の康熙帝に知らせ、数万を台湾近所まで派兵して康熙帝の下知を待っているという。ただ、厦門から北京迄の往復は六〇日もかかる。こうした情報が長崎に伝わったのである。

覚羅満保は、康熙五五年（一七一七）に閩浙総督となっていた。『重修台湾県志』によると福州より厦門へ駆けつけ、水師提督などへ檄を飛ばしたようである[17]。厦門から北京まで往復六〇日とあることから、おそらく覚羅満保が厦門にいるとの理解だろう。長崎に伝来した情報に松浦章は、事実との相違が若干見られる場合もあるが質としては高いとの評価を与えていて、今回紹介した六番厦門船の情報も同様の評価に値するものと言えよう。

唐船風説書は、三通作成され、一通は老中、一通は江戸在府の長崎奉行へ遣わし、残る一通は長崎奉行所に控を残していたことが、大岡清相の『崎陽群談』から知られている[18]。「華夷変態」には風説書が多数採録され、その数から風説書の作成、長崎奉行から江戸の老中への通達、ついで林家、さらに松平氏への伝達が滞りなく行われるルートが確立していたとの評価がある[19]。たしかに「華夷変態」の延宝二年（一六七四）六月八日付の序文から幕府の外交にも林家が関与していたことがわかるので[20]、こうした評価がなされたのは当然と言えよう。しかし、別稿で明らかにしたように、宗家から幕府に伝えられた情報のすべてが林家へ伝わったわけではない[21]。そして今回紹介した享保六年（一七二一）の六番厦門船の風説書の存在をふまえると、唐船風説書のすべてが林家へ伝わるルートが確立していたとは言えない。これらのことから幕府の得た海外情報を林家が把握する立場になかったことは明らかであろう[22]。

第二章　朱一貴の乱の制圧情報と国内への広まり

一　島津家と宗家の情報収集

朱一貴の乱制圧のために中国大陸から台湾へ派兵した情報は、七月一八日長崎入港の十八番寧波船で伝わった。その後、清軍が形勢逆転した情報が七月二四日長崎入港の二十三番台湾船で伝わり、朱一貴等が日本の暦で七月一六日に捕縛されたことが、八月二七日に入港した二十六番台湾船で伝わる。そして台湾へ派遣された兵が九月に福建・浙江へ帰還したものの、覚羅萬保は厦門にとどまっていることが二十九番広南船（一二月一二日入港）で、覚羅萬保が福州へ帰還したことが翌年の八番厦門船（五月二八日長崎入港）でそれぞれ伝わった。朱一貴などの処罰は康熙六一年（一七二二）二月に北京で行われ、このことをも同年の一〇番台湾船（六月九日長崎入港）で伝わった。

情報の発信地から着信地に伝わる時間は事象で異なるが、乱に関する情報が絶えず長崎へ伝わっていたことが以上のように確認できる。ではこうした情報が他のルートから入手できていたのか、この点を真栄平房昭の成果を参考にしつつ検証していきたい。

真栄平は尾張藩士天野信景の『塩尻　七十五』に「去々年（享保6年）明帝の裔朱一貴兵を挙て、しばしば騒がしかりしさまを書に筆して、南京より琉球に送る。中山王、是を薩州侯に参らせしを、頓て関東に献上ありしとかや。京人、其書により且街談を加へて五巻とし、今年癸卯夏印行せり。『台湾軍談』と題す。」とあることから、長崎に朱一貴の乱の情報が伝わったのと同じころ南京―琉球―薩摩―江戸のルートからも情報が伝わったと指摘する。

確かに島津家から幕府へ書籍が献上されたのは事実であり、福州で手に入れた『靖台実録』であろう。ただ島津家から老中戸田忠真に献上されたのは、享保七年（一七二二）一〇月一二日のことである[23]。享保七年のものと推定される安積澹泊宛の五月二二日付新井白石書簡に『靖台実録』のことが書かれていて、入手可能な経路として島津家があったことが知られている。この時期には江戸でこの書籍の存在は知られていたのであろう[24]。とは言え、新たな同時期の史料の存在が確認できれば別だが、長崎と同時期に琉球からも情報が伝わっていたとは言えないのではないだろうか。

ここで注目すべきは、島津家がこれを幕府へ献上する際、「台湾朱一貴謀反、去年迄為相治由申候、就夫段々風説多慥成事共難相知候故」[25]と記しているところである。つまり、乱が落ち着いたとの知らせが日本に伝わっているにも関わらず、次第に風説が多く広まっていて事実がわからなくなるといった状況に陥っていた、と島津家は理解していて、そのために『靖台実録』を幕府へ献上したのである。

対馬宗家文書の「唐兵乱風説公儀江被　仰上候控并朝鮮国山賊徒黨御案内被　仰上候控」[26]に、つぎのような記録が残る（丸数字と傍線は筆者による）。

【史料二】

享保六年辛丑年十二月四日

①當春以来南京之内臺湾嶋兵乱有之段長崎筋より相聞、江戸表ニ而茂専風聞有之候付、②其旨御国江申遣、朝鮮之方承合候様館守江被仰付置候、頃日聞合候趣御国より申来候付、則御口上書相認、今日御用番井上河内守様へ平田隼人持参、御用人音羽庄兵衛を差上之候處、御退出不被遊由ニ候間、追而被掛御目被下候

様申入、尤右風説之義朝鮮筋ニ聞候も大様之義ニ而御座候ゆへ、申上候段も如何奉存候得共承候義ニ候得ハ差扣候義も難仕申上候、御當地ニも風聞有之節より朝鮮ニも申遣承候由候得共、南京筋之義御座候ゆへ遅く相知候与奉存候、何分ニも宜被仰上被下候様ニ申置罷帰ル、御紙左記之、

先頃唐兵乱之風説有之段粗承候付、朝鮮江差置候家来共江申付為承候處、當六月朝鮮より北京江差越候使者帰国之節相聞江候者、南京朱氏之人兵馬を集、臺湾嶋と申所を攻取、勢イ甚強御座候付、北京ゟ討越有之由風説仕候与申越候、虚実之義難計候得共、承候趣申上候、以上、

十二月　　宗對馬守

右料紙奉書半切上包紙美濃、

傍線①から、江戸では享保六年（一七二一）の春以降台湾での朱一貴の乱に関する情報が長崎から伝わり、噂になっていたことが確認できる。長崎からの情報であって、琉球からとは書かれていない。

傍線②からは、今回の件、宗家には北京―朝鮮のルートから情報は伝わっておらず、そのため江戸から国元へ知らせ館守を通じて朝鮮へ問い合わせよと命じられたことがわかる。つまり、長崎に入った情報が江戸へ伝わり、それが宗家によって江戸から対馬へ、そして朝鮮に伝わるといった情報の流れであったがこれで確認できる。島津家が琉球を介して『靖台実録』を入手したのも、朝鮮から情報が伝わらなかった宗家と同様の状況、すなわち中国大陸や台湾から琉球、そして島津家といったルートによる情報伝達が、この段階までにはなかったからだと理解すべきであろう。朱一貴の乱に関する享保六年（一七二一）の記録が島津家の史料にないのも、この理由だと頷けるのではないだろうか。

二　情報収集地としての長崎

長崎に伝わった情報が、幕府に伝えられた。そして江戸で朱一貴の乱に関して取り沙汰されていたことは、ここまでみてきた島津家や宗家の史料から確認できた通りである。

先に用いた「大清康熙六十年台湾朱一貴乱覚書」は、田中如玉父が長崎表での風聞をもとに書き置いたものであり、長崎で作成された風説書が機密事項として厳重に管理されていたわけではないことを証明している。

つぎのような事例もある。享保八年（一七二三）に刊行された『通俗台湾軍談』は、島津家が琉球から取り寄せ幕府へ献上した『靖台実録』を粉本としたものである。この作者は、京都の書肆で上坂甚兵衛兼勝。島津家が幕府へ献上したものとは別本で職業柄『靖台実録』を手に入れた可能性がなくもないが、先に紹介した尾張藩士天野信景の『塩尻』に記されていた「京人」とはこの人である。そして「街談を加えて五巻とし」とあるように、長崎での風説で『靖台実録』を補い『通俗台湾軍談』はまとめられた。

後に大田南畝は『半日閑話』のなかで、「長崎の唐館ノ風説ノ書ヲ取合セテ書タルモノナルベシ。再按靖台実録ヲ本トシ、一二ノ人ノ風説を加ヘテ書シ物也。結語ハ全用靖台実録ニテ知ルベシ。」と記している[27]。天野が用いた「街談」は、大田の言葉にある「風説ノ書」「一二ノ人ノ風説」となるが、長崎で作成された唐船風説書の情報であろう。書肆の情報入手先としての長崎については、情報の入手方法など不明な点も多い。この点は今後解明していくべき課題であると考えている。

さて、こうしてみると、朱一貴の乱に関する情報が長崎から江戸へ伝えられ、そこからそれが大名家レベルで知られることになった。その一方で幕府に献上された『靖台実録』を書肆も手に入れ、長崎で唐人から得た情報や唐船風説書でこれを補いアレンジが加えられた『台湾軍談』の刊行で、朱一貴の乱を日本の社会に広めることになったのである。

かつて中村質は海外情報について、幕府がこれを機密として独占したとは認めがたいと指摘した。ここで明らかにした状況からも、この指摘が的を射たものであったことがわかる[28]。また、書肆に情報が渡ることで、幅広い層と広域に海外の情報が伝わっていったことが確認できたのである[29]。そして先に大田南畝の『半日閑話』を紹介したが、神沢杜口の随筆で第一巻に安永五年（一七七六）の序があり寛政三年（一七九一）の成立とされる『翁草』に「朱一貴の乱及び清朝」が記されていて、そのなかに「委しくは台湾軍記に録したれども」とある[30]。「台湾軍記」は「台湾軍談」のこととだと推測するが、後世にも読み継がれたのであった。

第三章　海外情報入手ルートの特質

以上、朱一貴の乱に関する情報の国内における拡散と伝来に関してみてきたが、本章では各口から入る情報の質に注目する。この点、長崎、島津家についてはここまでにも関連することを述べたので、北京―朝鮮―対馬ルートをみていく[31]。

当時の藩主は宗義誠で、享保三年（一七一八）に義方の跡を継いだばかりであった。宗家が江戸で得た朱一貴の乱の情報を国元へ知らせ、館守を通じて朝鮮へ問い合わせよと命じたことを先に述べたが、これは「役」への意識からである。

つぎのものは、徳川家宣の代に宗義誠が老中へ提出した宝永六年（一七〇九）の代替わり誓詞である[32]。

【史料三】

起請文前書

一御代替付弥珍重　公儀大切可奉存候事、
一忠勤之志肝要奉存、自然邪儀於被申掛者、御一門を初雖為親類縁者知音之好早速可申上候事、
一日本朝鮮通用之儀、心之及候程入念御為能様可仕候、若御隠密之儀被　仰出候共一切他言仕間鋪候事、
一朝鮮通用書翰之儀入念私無之様ニ可仕候、尤日本之儀朝鮮と存替申間鋪候事、
一異国江御制禁之武具朝鮮国江不相渡候様ニ堅申付候事、
右條々雖為一事於致違犯者

（神文略）

宝永六己丑年四月十六日　　宗対馬守御居判

土屋相模守（政直）殿
小笠原佐渡守（長重）殿
秋元但馬守（喬知）殿
本多伯耆守（正永）殿
大久保加賀守（忠増）殿
井上河内守（正岑）殿

日朝関係で努める役は、将軍代替わり誓詞に記すほど宗家にとって重要な役割であったことがわかろう。このなかで重要視されたひ

とつに、海外情報の幕府への伝達があった。

倭館に派遣される館守は、「館守条書」によって職務が確認された。そのなかに虚実に拘わらず朝鮮国及び北京筋の風説を報告することがあった[33]。こうしたことを忠実に守る宗家の動きがみられた例として、三藩の乱の時がある[34]。三藩の乱は、康熙一二年（一六七三）に雲南の呉三桂、広東の尚之信、福建の耿精忠が起こした反乱だが、宗家は幕府からこの件について問い合わせがあった場合に「対馬守不存と被申越難成事ニ候」との認識を持っていた。そしてこの意識は強く、延宝二年（一六七四）七月二八日に館守高勢八右衛門へ「実否ともニ朝鮮表之沙汰不承候而不罷成役目ニ御座候故、被相尋候通被申聞候ハヽ、軽成共重成とも可申入候条、其意趣書付御越し可被成候、罷成儀ニ候ハヽ貴様迄之書付請取被差越候得ハ御手前之御念ニ茂罷成儀ニ候、此段為御心得申入候」と国元へ送り、いかなる情報をも朝鮮にいる館守に求めていたのである[35]。

さて、前章で紹介した【史料二】は、宗家が朝鮮に問い合わせた内容を老中井上正岑へ伝えたものである。宗家が入手した情報は、享保六年（一七二一）六月に朝鮮から北京へ派遣された使節から得られたものだった。それによると、南京の朱氏が兵馬を集めて台湾を攻め取り、その勢いが強いので北京から討ち取りに行くという風聞があるとのことだった。

ただ、虚実の判断が付かないと説明している。宗家は長崎からの情報を知っていて、その内容と異なることを理解したのだろうが、将軍代替わり誓詞にあるように朝鮮から伝わった情報に手を加えることなく幕府へ報告したのであった。情報の質は別として、宗家が幕府に忠実な姿勢をアピールできたことに間違いはない。

話を戻すと、「分類紀事大綱　二十五」には同年一〇月九日付で崔知事が館守へ伝えた内容が記されている[36]。先の朝鮮から北京への使節は謝恩使で、「南京之朱氏之人、大明之子孫之由、義兵を集南京之内ニ斬入、台湾島と申所を斬取、賊盗段々ニ招キ集、勢甚強御座候付、北京討伐有之筈ニ候故、定而相滅可申由風説仕候」とある[37]。朱氏とは朱一貴のことであろうが、明の皇帝の子孫、また、義兵を集めて南京に斬り入って台湾を斬り取って、盗賊を次々に招き集めて勢いが甚だ強い、といった偽りが伝わってきたのである。正確な情報が台湾から厦門、福州、そしてそこから北京へ伝わったに違いない。しかし、それらが朝鮮からの使節に漏れ聞こえることはなかったのであろう。

では当時の北京の社会では、どうだったのか。第三者の立場で北京における朱一貴の乱の情報の影響がわかるものとして「あるイエズス会宣教師の書簡　一七二一年、北京において」[38]がある。表現には誇張されたところも当然あろうが、そこにはつぎのように記されている。

【史料四】

われわれは本年数か月間、台湾島が皇帝支配の羈絆を脱したけれども、そのあとで鎮圧されてしまったのを知りました。福建とケウミイの漢人の支援を受けた土地の漢人たちは逃亡したただひとりのものを除いて役人たちを殺害し、皇帝の軍隊をみな殺しにしました。このニュースが北京に広まった時、ひとびとはオランダ人がこれとは確かになんのかかわりもなかったにも拘わらず、叛乱を間違いなくかれらのせいであるとしました。こういった噂は申すまでもなくシナ人と外国人との間に存する反目を背景とするものですし、ヨーロッパ人をシナ国民にとっ

てうとましいものとすることを意図して流されたものです。しかしながらしばらくして皇帝の新たに派遣された軍隊が首府に入り、山中に脱出した首領はべつとして叛徒の一部を殺し、残党は四散してしまったということが分かった時、ひとびとは歓喜しました。

最初の一文からわかるように、乱の終結後に記されたことがまず確認できる。そして台湾が清朝による支配の手から離れ、この知らせが届いた時の北京では理由なくオランダの人によるものだと決めつける状況があったことがわかる。当然皇帝へは正確な情報が伝わったはずだが、そうしたことが漏れ聞こえてこない状況があったと推測できる。康熙帝の派兵命令が功を奏して台湾を再び取り戻した際に北京の人々の歓喜に包まれた様子は、それだけ北京の人々にとって台湾の問題が心配事だったことの証と言えよう。

北京で起きたことでもなく台湾から距離もあり、その他のレベルの情報も北京までは届いていなかったということなのだろう。清にとっては情報の管理が徹底できていたことになる。

時間が経っても朝鮮は、正確な情報を入手することができたわけでもなかった。宗家の記録にある翌七年の「三月四日之来状」には、「唐兵乱之義承合候処、先達而朱乙貴と申人、台湾ゟ恩明（思カ）・厦門之内責入、南京之諸郡を侵掠いたし候処、北京大兵を以征伐有之、朱乙貴敗走ニ及、間もなく致降参候由」とある[39]。

朱一貴などの処罰が康熙六一年（一七二二）二月に北京で行われたことは先に述べたが、朝鮮は首謀者の名前を何らかのルートで確認できたのであろう。しかしここには、台湾から厦門へ攻め入り、南京の諸郡を侵略したといった事実ではないことが書かれている。乱後であってもこうした情報しか朝鮮が得られなかったことから類推すると、清国の内政に関する朝鮮の諜報活動は脆弱だったとしか思えない[40]。朝鮮と日本の関心事が必ずしも一致しないのは当然のことであるものの、清における朝鮮の諜報活動の質が低いから対馬ルートから入る大陸情報は正確さを欠いていたと言える部分もあったということなのだろう。

宗家は朝鮮を介して北京の情報を得ようと勤めたが、その意欲とは裏腹に質の低い情報しか得られなかったのである。これは清朝関係、特に朝鮮の諜報活動に頼るところが多く、宗家の要望がそれに影響力を持つはずもなかった。朝鮮が朱一貴の乱に関する情報を得ながらも『朝鮮王朝実録』に朱一貴の記載がないことは、朝鮮がこの件を重要視していなかったことを裏付けるものだと考える[41]。それに加えて朝鮮と宗家の関係があるわけで、公的な関係での情報ルートではあるものの正確な情報が伝わりづらい状況にあったのである。そのため幕府にとってみると、宗家からの情報は長崎伝来の情報を補うものになり得なかったのであった。

島津家は、琉球の清朝への朝貢使節や福州の琉球館での諜報活動から得た情報だったが、清朝と琉球との公式な情報のやりとりは清朝と朝鮮との関係に近いはずである。しかし、朱一貴の乱については、北京よりも台湾は近く情報入手のルートが複数であっただろうし、現地に近いという地の利で、他の信憑性の高い情報が巷に流れていたことは間違いあるまい。また、島津家の影響下での琉球の諜報活動は、宗家と朝鮮との関係と比較にならない目的の共有がなされていたはずである。これこそ、福州―琉球―薩摩―江戸ルートの方が北京―朝鮮―対馬―江戸ルートと比べれば情報の質が高くみえた理由なのである。しかしこれも長崎に入った情報と比べると量も

質も、そして伝達時間も劣っていたことは「華夷変態」に収載されている唐船風説書を見れば一目瞭然である。朱一貴の乱についてみると、情報入手ルートのそれぞれの関係はこうしたものだったのである。

おわりに

本稿では大陸情報の日本伝来について、これまで取り上げられることが少なかった朱一貴の乱を例に、長崎、薩摩、対馬を意識して分析した。明らかになったことを改めて述べると、以下の通りである。

①これまで朱一貴の乱に関する情報が日本に伝わった最初の記録として用いられたのは、享保六年(一七二一)六月二五日に長崎入港した十七番寧波船の風説書であった。しかし本稿でそれ以前の六月一三日に長崎へ入港した六番厦門船の風説を紹介し、その内容から朱一貴の乱を鎮圧するプロセスが比較的に正確に日本に伝えられていたことを確認した。

②長崎には、来航する唐船からつぎからつぎに朱一貴の乱に関する情報が伝わったが、それらは江戸に送られた。江戸では朱一貴の乱の風聞が広まり大名家レベルでも情報の収集に取り組み、島津家は琉球を通じて、宗家は朝鮮を通じて長崎とは異なる情報の入手に励んだ。島津家が手に入れた『靖台実録』は書肆の手にも伝わり、乱が発生して二年後に『通俗台湾軍談』が刊行され、日本の社会で朱一貴の乱が広く知られることになった。こうした国内での情報の流れを解明した。

③そして最後に、宗家が入手した北京―朝鮮ルートで手に入れた朱一貴の乱に関する情報をはじめて紹介し、他の情報と比較して質が悪かったことを明らかにした。長崎、薩摩、対馬からの情報を比較すると、それぞれのルートに独自の性格があり、それが情報の質に大きな影響を与えたが、やはり長崎が量、質、そして情報発信地からの受信にかかる時間についても他のルートより優位だったことが明らかとなった。ただこの点は、情報の内容や情報発信地と受信地の関係などによってそれぞれの優位は変化するものであると理解しているので、あくまで朱一貴の乱の場合は、という条件付きである。

ところで、長崎へ届いた情報は唐船による風説書からわかるわけだが、これまでの研究はそれを収載した「華夷変態」を用いて進めてきた。幕府が得た海外情報を林家は握っていたとの理解が研究者のなかにあり、この理解を前提に無批判に用いてきた。しかし別稿で、対馬から幕府に伝えられた情報が林家へすべて伝わっていなかったことを指摘した[42]。つまり、林家が知りえた情報と幕府が知りえた情報は、重なり合うものではなかったのである。

こうした点をふまえると、海外情報に関する史料の残存状況を改めて確認する必要があることが理解いただけるだろう。特に大老・老中を輩出した大名家の文書群から海外情報を抽出して分析することが必要だろう。そして分析するにあたっては、その海外情報の伝来の把握であり、複数の伝来があった場合、伝来ルートの比較分析が大事になると考える。一様ではない「口」の存在と幕藩体制との関係の理解を、海外情報を通じて深めることで、近世日本の外の世界との向き合い方の特質を改めて問うことも可能なのではないだろうか。

(長崎県立大学国際社会学部准教授)

註

1 松方冬子『オランダ風説書と近世日本』東京大学出版会、二〇〇七年。『オランダ風説書』中央公論新社、二〇一〇年。同『別段風説書が語る19世紀』東京大学出版会、二〇一二年ほか。

2 『近世日本の国家形成と外交』創文社、一九九〇年。

3 荒野泰典『近世日本と東アジア』東京大学出版会、一九八八年、鶴田啓「近世日本の四つの「口」」『アジアの中の日本史Ⅱ』東京大学出版会、一九九二年などを参照されたい。

4 三藩の乱については、浦廉一「台湾鄭氏（特に鄭経）と朝鮮との関係」『広島大学文学部紀要』三、一九五三年。神田信夫「三藩の乱と朝鮮」『駿台史学』第一号、一九五一年。後に『清朝史論考』山川出版社、二〇〇五年に所収。松浦章「東アジア世界を巡る「三藩の乱」情報」『関西大学東西学術研究所所報』第四六号、一九八七年。後に改稿され、同『海外情報からみる東アジア』清文堂、二〇〇九年に所収。細谷良夫「三藩の乱の再検討―尚可喜一族の動向を中心に―」『東北大学東洋史論集』第二輯、一九八三年。細谷良夫「三藩の乱をめぐって―呉三桂の反乱と楊起隆・朱三太子事件」『戦争と平和の中近世史』青木書店、二〇〇一年。郭陽「唐船風説書に見る鄭経の「西征」」『東洋史論集』四二、二〇一五年。郭陽「海澄攻防戦（一六七八～一六八〇）をめぐる清朝と鄭氏勢力―『華夷変態』を中心として―」『東洋史論集』四三、二〇一六年ほか。

5 松田吉郎「朱一貴の乱について」大阪市立大学東洋史研究室編『大阪市立大学東洋史論叢』一〇号、一九九三年ほか。

6 『思想』七九六、一九九〇年。

7 『海外情報からみる東アジア』清文堂出版、二〇〇九年。初出、『満漢史研究』一、二〇〇二年。このほか、田中梓都美「台湾情報から台湾認識へ―江戸幕府の収集した台湾情報と人々の台湾認識―」『東アジア文化交渉研究』第一〇号、二〇一一年。なお、田中氏は「華夷変態」について、統治する清朝の文献と比べても遜色ないほどの正確さを備えていると理解している。

8 前掲松田吉郎「朱一貴の乱について」、前掲松浦章「清代台湾朱一貴の乱の日本伝聞」ほか。

9 『華夷変態（下冊）』東洋文庫、一九五九年、二九〇二頁。

10 紙屋敦之『江戸時代長崎来航中国船の情報分析　研究成果報告書』二〇〇五年を参照。

11 金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵。

12 「拾番台湾船之唐人共申口」前掲『華夷変態（下冊）』二九三六・九三七頁。

13 前掲真栄平房昭「「近世日本における海外情報と琉球の位置」。

14 「大清康熙六十年台湾朱一貴乱覚書」金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵。

15 「拾九番南京船之唐人共申口」前掲『華夷変態（下冊）』二九〇四頁。

16 前掲松浦章「清代台湾朱一貴の乱の日本伝聞」。

17 前掲松浦章「清代台湾朱一貴の乱の日本伝聞」。

18 中田易直・中村質校訂『崎陽群談』近藤出版社、一九七四年。

19 紙屋敦之「唐船風説書の編綴について」『江戸時代長崎来航中国風説書の情報分析　二〇〇三・二〇〇四年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究報告書』二〇〇五年。

20 川勝守「韃靼国順治大王から大清康熙大帝へ『近世日本の政治と

外交』雄山閣、一九九三年、後に『日本近世と東アジア世界』吉川弘文館、二〇〇〇年に所収。

21 拙稿「『華夷変態』と対馬宗家からの「唐兵乱」情報」『国際社会学部研究紀要（長崎県立大学）』創刊号、二〇一六年。「華夷変態」の延宝二年（一六七四）六月八日付の序文から幕府の外交にも林家が関与していたことがわかるが（川勝守「韃靼国順治大王から大清康熙大帝へ『近世日本の政治と外交』雄山閣、一九九三年、後に『日本近世と東アジア世界』吉川弘文館、二〇〇〇年に所収）、その程度は再検討されるべきであろう。

22 海外情報と江戸の政治判断における林家の位置づけについては、今後の課題としておきたい。

23 『鹿児島県史料　旧記雑録追録三』鹿児島県、一九七三年、五八七頁。当時徳川吉宗は漢籍の収集を行っていて、そうした事情も島津家は知って動いたのかもしれない。この件は、大庭脩『徳川吉宗と康熙帝：鎖国下での日中交流』（大修館書店、一九九九年）などを参照されたい。

24 宮崎道生『新井白石の洋学と海外知識』（吉川弘文館、一九七三年）の第二部　第二章を参照されたい。

25 註23を参照されたい。

26 「唐兵乱風説公儀江被　仰上候控」慶應義塾大学三田メディアセンター所蔵。

27 徳田武『日本近世小説と中国小説』（青裳堂書店、一九九二年）の第一部第五章。

28 中村質「初期の未完唐蘭風説書と関連史料」田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館、一九八七年。

29 前掲田中梓都美「台湾情報から台湾認識へ―江戸幕府の収集した台湾情報と人々の台湾認識―」では、『台湾軍談』について朱一貴に関する事柄を脚色し、一編にまとめたもので、当時の台湾情報を直接的に伝えたものとはいえない、と言い切っている。確かに前掲徳田武『日本近世小説と中国小説』でも明らかにされているように、『台湾軍談』は朱一貴を英雄化している。とは言え、「靖台実録」のほか長崎で風説書を集めるなど情報収集をしたうえで作成されたものである点を軽視してはいけないように考える。この点に注目すると、当時の台湾情報を直接的に伝えた部分もあると理解した方がよく、「伝えたものとはいえない」とまで言い切ることは決してできないと考える。

30 『日本随筆大成〈第三期〉19』吉川弘文館、一九七八年。

31 近年の近世日朝関係史に関する傾向については、木村直也「東アジアのなかの近世日朝関係史」（北島万次・孫承喆・橋本雄・村井章介【編著】『日朝交流と相克の歴史』校倉書房、二〇〇九年）を参照されたい。

32 韓国国史編纂委員会所蔵。

33 田代和生『近世日本通交貿易史の研究』創文社、一九八一年。同「日朝交流と倭館」丸山雍成編『日本の近世　第六巻　情報と交通』中央公論社、一九九二年。

34 註4を参照されたい。

35 「分類紀事大綱　三拾三」国立国会図書館所蔵。

36 韓国国史編纂委員会所蔵。「分類紀事大綱」については、前掲田代和生『日朝交易と対馬藩』の第五章、『参考書誌研究』七六号（国立国会図書館所蔵「宗家文書」目録、勉誠出版、二〇一五年）を参照

されたい。なお、二十五は第二輯にあたり、序文は寛保元年（一七四一）である。

37「享保六辛丑年　二十一番　毎日記弐　自八月至十二月　館守樋口弥五左衛門」（国立国会図書館所蔵）にも関連記事が載る。

38 矢沢利彦編訳『イエズス会士中国書簡集４　社会編』東洋文庫、平凡社、一九九五年。

39「分類紀事大綱　二十五」韓国国史編纂委員会所蔵。

40 こうした朝鮮の状況は、三藩の乱の時も同様であった。註４に紹介した論文を参照されたい。

41『朝鮮王朝実録　四一　粛宗実録（四）・景宗実録（全）・景宗修正実録（全）・英祖実録（一）』国史編纂委員会、一九八六年。

42 註21を参照されたい。

本研究はJSPS科研費15K02868、「大陸情報と江戸幕府の対外政策」の助成を受けたものである。また、本稿執筆にあたっては慶應義塾大学三田メディアセンター倉持隆氏、県立対馬歴史民俗資料館古川祐貴氏に大変お世話になった。ここに記して謝意を表したい。